



Title	Group-Level Self-Regulation in Self-Directed Learning [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	譚, 翠玲
Citation	北海道大学. 博士(国際広報メディア) 甲第15810号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91960
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Tam_Chuilong_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア） 氏名：譚 翠玲

審査委員	主査	准教授	山	田	悦	子
	副査	特任教授	河	合	靖	
	副査	助教（教育学	堀	晋	也	
		院）				

学位論文題名

Group-Level Self-Regulation in Self-Directed Learning

（自己主導型学習におけるグループ・レベル自己調整）

本研究は、オンラインによるグループでの自己主導型学習における自己調整を研究対象とした、自律学習に関する応用言語学研究である。当該分野では、協働学習、アクティブ・ラーニングなどが盛んになる中で、これまで主に教室内の教師主導型学習におけるグループ・レベルでの自己調整が取り上げられてきたが、本研究は、教室外での自己主導型オンライン外国語学習を対象としている。著者は、学習者の自律性を「学習を統括する能力」(Benson, 2011)と定義し、その能力が自己主導型学習を支えていると指摘する。自己主導型学習のプロセスを統括する手段は自己調整であり(Hadwin & Oshige, 2011)、個人レベルとともにグループ・レベルの自己調整の理解を深めることも重要であると、著者は主張する。

本研究では、先行研究で用いられたグループメタ認知尺度(GMS)をオンライン外国語学習用に改訂し、これを用いてオンライン上で募集した研究参加者からデータを収集した。また、自己調整に基づいた修正フィードバックの授受について、記述回答を得る形でデータ収集し、グループ・レベルの自己調整プロセスに考察を加えた。因子分析の結果、先行研究と因子構造が同じであり、改訂GMSが本研究の学習文脈に適用可能なことが確認された。また、本研究の結果と教師主導型学習に関する先行研究2例の結果を比較した場合、教師主導型学習のなかでも自律学習への習熟度が高いと思われるグループよりは自己調整技能が低く、習熟度が低いグループと同等であった。修正フィードバックの授受に関する調査では、どのように修正フィードバックを行うかに関する事前の調整はあまり行われていないが、与えられる修正フィードバックには概ね満足していることが窺われ

た。このことは、社会的共有調整があまり行われていないことを示唆していると著者は主張する。提出論文は、論文剽窃チェックソフト (iThenticate) により、剽窃のないことを確認済みである (2023 年 11 月 12 日)。

口頭試問は 2024 年 1 月 5 日 10 時 30 分から約 1 時間 30 分にわたって行われた。まず、博士論文提出者が約 20 分間論文の内容についての発表を行った。次に、審査委員との間で研究の意義、新規性、方法論などの観点から約 40 分間の質疑応答が行われた。その後、約 30 分間審査委員のみで本論文の審査を行った。

口頭試問では、次のような点について質疑応答が行われた。修正フィードバックを行う頻度の状況と質的な分析でオープン・コーディングとして行ったプロセスの詳細。リサーチ・クエスチョンと分析手法との適合性。外国語教師に対する本研究の示唆。研究における用語の概念的な相違と研究課題に対する学術的な立場。検証的因子分析ではなく探索的因子分析を行った意図と t 検定による比較の具体的な説明。研究 1 と研究 2 で因子分析を繰り返した理由。本研究の学術的な位置づけ。以上の点について、著者からは真摯かつ誠実な態度で回答がなされ、その内容も概ね適切で妥当であった。質疑応答を通して、著者が研究者としてこの研究に込めた意図や外国語教育に対する貢献の意思が感じられ、博士論文口頭試問として問題のない水準であったと判断される。

質疑応答の後、著者本人及び参加者の退出後、審査委員のみによる審査が行われた。審査委員は、次の 3 点で本論文を高く評価し、その意義を認めると判断した。まず、第一に、本研究でオンライン外国語学習における自己主導型学習を取り上げたことは、インターネットの普及とグローバル化の進行、ならびに言語環境の多様化が進む中で、学術的にも社会的にも意義がある。とくに、異なる言語の母語話者が互いの母語を学びあうために、学習者と学習支援者の役割を交替しながらオンライン上で学習を進める e タンデム学習を取り上げたことは独自性が高い。第二に、自己調整の中でも、グループ・レベルの自己調整に焦点を当てた点に新規性を認める。学習者オートノミーは、個別自習型学習のみならず協働学習にもあてはまる。しかし、外国語教育における自律学習研究ではグループ・レベルの事項調整に関する先行研究がまだ少なく、本研究が嚆矢となると思われる。第三に、教室外での自己主導型学習を取り上げた点は、外国語教育への社会的還元の中で評価できる。教室内で本研究の改訂 GMS を用いて外国語学習の自律性を高める指導をすることで、教室外あるいは卒業後の自己主導型学習に肯定的な変化が期待できる。

一方、問題点としては、サンプルサイズが十分ではなく一般化に難がある、自己調整のプロセスを具体的・総合的に考察するところまで行っていない、比較分析をする際の比較対象が分かりにくいなどが指摘された。こうした問題は残されているものの、今後の当該分野の研究に大きな指針と影響を与える研究であることは明らかであり、本論文は高い学術的意義を持つ。よって、審査委員会では本論文を、博士 (国際広報メディア) の学位を授与される資格があるものと判断した。